



薪での調理



炊き出し

ガザからの声②

危機的な状況でも 創意工夫で新しいことに挑戦

from Gaza

フィダ・シュラブさん(アトファルナろう学校広報担当)

ガザで障がい者支援を長年続けてきたアトファルナろう学校。人道危機の中でどのように活動してきたか、広報担当のフィダ・シュラブさんに話を聞きました。アトファルナろう学校は、1992年にパレスチナ子どものキャンペーンが支援して開校したガザで最初のろう学校です。27人の子どもで始めた小さなNGOは、30年たって300人以上が通学する総合的な施設になっていました。ガザの人道危機が始まってからは、炊き出し、物資配布、子ども支援などで協働しています。

最近、アトファルナは、ヨーロッパの「ゼロプロジェクト」から賞をもらいました。障がいがある人とないない人の間のバリアー（障壁）をゼロにする活動が評価されたからです。具体的には、炊き出しの活動を30人以上の聴覚障がい者がスタッフとして支えていることです。障がい者は、「支援を受ける人」とされてきましたが、ガザの危機では支援をする側に立っていることが評価されたのです。

ラマダン（断食月）に入り、価格は高いものの野菜や肉などの炊き出しの食材を買うことができるようになったので、伝統的な料理を提供しています。ラマダンの期間は他の団体も炊き出しをすることが増えますが、アトファルナがガザで一番おいしい炊き出しを作っていると自負しています。ガザには、プロパンガスを入れることが禁じられているので、薪を使って調理をしています。薪での調理には大変時間がかかるのですが、最近ソーラー電気を使ってファンを回して熱効率を上げ、調理時間を短縮することもできるようになりました。元は外国製ですが、ガザでも装置を作っても

らい活用しています。

パレスチナ子どものキャンペーンの支援による炊き出し（毎日平均850食）は、ガザ市内に15カ所ある「ラーニングポイント」（寺子屋）でも行っていて、活動を終えた子どもたちが家族のために持ち帰っています。また、障がい者たちが安心して取りに来られるように配布場所を決めています。こうした場所は、避難者の多い地域に設定しています。

戦争前アトファルナには、建物が二つありました。表の建物は破壊されてしまいましたが、裏側の建物は修復すれば使える状態です。ただ、修復に必要な建築資材があまりにも高価であることと、この建物にはまだ100人以上が避難所として生活をしているため、この人たちが移動する場所が見つかるまでは、別のところで活動をしています。

元々アトファルナでは、ろう学校のほかに「聴音クリニック」や「スピーチセラピー」「補聴器外来」などのサービスを提供していましたが、これらを再開しました。



子ども支援の活動（ハンユニス）

ガザでは、3万5千人が新たに聴覚を失ったといわれます。アトファルナにも毎日40~60人が診断を求めて来訪します。爆撃によって吹き飛ばされて頭を負傷したとか、聴力が突然悪くなったなど、戦争が原因と思われる人が大変多くいます。最近心配なのは、新生児の難聴の増加です。いまのところ原因はつかめていません。そして、多くの人が聴力を失っているのに、補聴器が入手できないという問題があります。補聴器、車いすや杖、またそのスペアパーツ、電池などの補助器具は「軍事利用できる」という理由で、ガザに入れることが禁じられています。ヨルダン川西岸などで購入し、国連に運んでもらいますが、それでも3か月以上かかります。

60万人いるガザの子どもたちは、この3年近く教育を受けられないまま放置されてきました。学校の60%は破壊され、残った学校は避難所になっています。ごく一部の学校は再開されましたが、1週間に12コ

マの授業しかありません。栄養状態も依然としてよくありません。NGOは子ども支援の活動をしています。まだほとんどの人たちには届いていません。最も脆弱な障がいがある人はいくらでもありませんし、子どもに必要な遊び場やおもちゃは、当然ながら後回しにされています。

アトファルナのラーニングポイントはガザ市以外にもあります。テントですが、新たにアトファルナの工房で制作した机や椅子で約4千人の子どもたちが学んでいます。聴覚に障害がある子どもも一緒にクラスにいるため、他の子どもも手話ができるようになりました。お腹が空いては学習もできないため、前にお話したように炊き出しも実施しています。

ガザの状況は相変わらず厳しいですが、できることを続けるだけでなく、創意工夫をして新しいことに挑戦していこうと考えています。（2月23日）



聴覚検査も再開した



テントでの「ラーニングポイント」